

75 明治9年11月5日 菊池長閑宛

第十四号十一月五日 (長閑注記)

誰も西洋人の家内の様子ハ委敷手紙に書人は無様なれ共今度少し申上ます市中ハ皆煉瓦作りなれ共私の居所ハ御存之通り繁雜之地とハ些と欠離れたる部故木造にて三階なり大概三階以上にて二階の無家へ先なし一体家造ハ曠あ高まくして湿氣を防ぎ且其下の地を掘て穴倉を作り(町にてハ往還の(抹消)高さハ)並にカラス窓を開て日光を入食堂杯(用ユ)火焼釜を据たり諸道具を置なり先段を登れハ戸の側に鈴の引手あり右を引は鈴の音を聞付取次出来る何の誰誰様に御目に掛りたしと云へハ是江迎応接の間に通す応接の間にハ「ピヤノ」と云楽器あり写真帖机様の物台違棚にハ蠟燭建花瓶(ついで)を飾り毛氈腰懸ケも最良なる分を此間ハ布並なり此間にて応対するハ余程格立たる時なり日本の玄関又ハ表座敷杯に当る然し日本の如く戸口迄別にてハなし(抹消)戸(を)内(を)入れハ正面にハ二階江の階子段あり階子段側方に鏡あり笠上衣掛傘建等あり左右に部屋あり其一ツハ応接の間と知へし今少し親敷人なれハ書房無家もとて常に家内の寄て話す部屋に誘ふ亭主出来り手を握合あり機嫌を問ふ無地不知の人に初て逢時ハ只頭儀をし寒暖の挨拶杯するなり親キ女同士とか血筋の男女従兄弟姉妹迄なり 同士なれハ口吸す

るを以て礼となす男同士ハ手を握計なり一寸見舞に来たる時ハ上衣日本の羽織に当るを不取男ハ帽を手に持女ハ笠を脱すに話すなれ共緩々ノ節ハ男女共上衣帽笠を脱して談するなり此書房にハ中央に小机あり廻りに椅子横長き腰掛あり殊に女子用ユるなり男女の腰掛に高低の差あり男高女低寒暖の挨拶知合の様子を問答杯(す)し其他四方山の談始る格別に誰かの友達なれハ其人客を己の部屋に導て打解なり家内銘々に部屋あり皆二階三階住居なり依て彼正面の梯子段を登り御祖母様の部屋ハ表向の左り姪の部屋ハ右にて何れも往還を見下す仮に御祖母様の女客とすれハ其部屋に入部屋内にハ臥床片側に在(抹消)簞笥(片)向側に在(抹消)簞笥の上に鏡あり其所にて御客ハ髪を撫直し襟を直す等の事終りて椅子に寄て話(す)し壁に掛ある絵画類を誉杯するなるへし右の如絵ハ前条の応接の間并書房にも掛並置なり昼時分なれハ夫なりに(抹消)仕度(を)をなし出来たる時に鈴を鳴して昼飯なるを報す二階三階故走り廻て御膳宜ふと為知てハ手間取故なり亭主客を引梯子を下り書房より表向の戸を開食堂に連行中央に食卓あり上に御馳走の品を飾り並食卓にハ白き木綿切レを布く未タ見さりし時にハ爰にて御客の名を私共に私の名を御客に告るハ亭主の役なり上座ハ卓の縦の端とす依て客を其座に就しめ御祖母様と一人の姪ハ卓の横に向合て座す南部君は客の右横私と一人の姪此姪ハ下女兼妻なりハ客の向合て座を占む「スープ」肉を煮出し汁なりを飲了後ハ牛或ハ鶏肉の皿を持参る卓横の姪ハ庖丁と熊手を取り肉を切分け皿に盛り御祖母様に渡す御祖母様ハ芋其他の野菜を添客に渡す牛の何様の所又何野菜を好むかと問ハ常なり例の小刀肉脂素より並へ有なれハ亭主御遠慮なく御上りと云ふ

「パン」を食ふと云へハ「バター」を小皿に盛て遣る此へ常に私の役目なり総て皿を廻すにハ小人数故手より手に渡し下女をして別段立廻しめ後醬油の代りに塩を用ゆ塩ハ銘々の前に備置肉了れハ下女とハ云下女役を勤むる家内の者もの立て器皿を取去り卓上の塵を掃ふ夫より茶道具を御祖母様の前に据菓子に向ひの姪の前に据一人ハ茶を廻し一人ハ菓子を廻す茶にハ砂糖と牛乳を交て飲私共居なら茶ハ日本茶を用居なら右了て亭主先座を立客之に次夫より彼書房に至て再び談話す此食堂の在ハ流し前なり夫より裏戸ありて庭に出へし物売ハ総て此裏戸に廻る泊り客なれハ客部屋を与ゆ此部屋にハ箆箆鏡台洗手水水こぼし便器瀬戸にて造あり不自由なし客部屋の向ハ南部君の部屋にて姪の部屋と裏合せなり祖母様の部屋前より戸を明て右ハ客左ハ南部君の部屋と知へし南部君の部屋前より流し前に下る階子あり客部屋の隣即表よりの突当りにハ風呂場便所あり二階に風呂と便所あると云ハ日本人にハ些と分懸事なるか高い源即ち水溜より管にて水を引ある故源の高サ丈ハ家に引ても上る道理ハ丁度東京の水道にて堀の下を通して有所ハ一方の土手より向の土手に上ると同し割合なり夫故二階にも水を引へし一ツの管を流し前の火籠の側に引其所より風呂場に管を登せたる故湯と水と両方有仕掛なり櫃ハ細長して休の横ハる様造りあり両銚つやを抜ハ湯も水も出る別に小サな流水台あり此処にも湯と水の管あり其向に便場あり仕舞は直に水にて流す趣向故常に奇麗にして臭気なし流セハ矢張遺跡の水と同様に管を伝て下る訳なり風呂場と便所ハ何所にてても大概同し所に在なり其前より階子あり登て右の表部屋ハ私の部屋向に部屋隣り

に部屋あり用意部屋と物置部屋なり裏向に又六部屋あり是ハ下女兼帯先生の部屋なり私の部屋ハ三間に二間半計りあり南部君の部屋ハ少し広し何れも箆箆鏡台洗手道具便器臥床ありて部屋の内にて身仕度出来るなり是ハ一般の押入ありて物を置へし椅子抹消ハ〔宿〕備あれ共書机書棚等ハ自分持来ねはなし朝六時半日寛の鈴鳴起て身仕度をなす七時に朝飯の鈴響朝飯ハ極手輕にて冷肉か玉子日曜日なれハ鱈むしりを太福餅形に拵揚煎いたるもの魚の球と云か豆日本にてハを豕の出しにて煮たるもの右二品ハ北方諸州に限りたる風俗と知へし日曜日にハ必食馬に喰す豆にパン茶コップキーなり八時十分過にハ南部君蒸氣車にて学校に往食後姪共自分等并私共の寢床便器等を掃除す私ハ十時二十分過の蒸氣車にて学校に趣こ十二時より二時迄講義を聞三時の車にて南部君と一所いに帰宅す三時半過にハ昼飯の鈴鳴夕飯ハ喰ぬなり然し土日曜日両日にハ二人共学校ハなき故昼飯ハ一時夕飯ハ六時に食なり二人共学校日ハ便当べんたうを持行なり毎食後書房にて新聞紙を読たり話たりするなり寒気候にハ彼穴倉に在火燒釜に石炭を焼火温ハ管を伝はり家中を暖むる烟出の傍たる部屋々々ハ直に烟出より火気を引なり扱西洋の戸ハ尽廻し戸にて日本の障子様の拵極少なり応接の間杯の仕毎戸に鑰あり鍵あり入口の戸便所の戸ハ勿論部屋々々の戸にも鍵あり着換身仕度杯する時ハ鍵を懸るなり只戸をメ事もあり人の出入の多少に人の部屋に入んと欲する時ハ必ず戸を叩を礼とす依て差あるへし飯令戸ハ開き居差支なければハ這入と云ふ其時入なり至極適當の銘々自分の部屋鍵箆箆押入机等の鍵を隠しに入て持居なり表戸の鍵も渡し置何故なれハ表戸ハ用心の為何時も鎖し有鍵なければハ開ぬからなり食間ハ女共針

仕事読書等をするなり夜ハ九時半に銘々の部屋に引取臥日曜日
夜にハ楽器を弄ひ歌を唱ふ敬神の謡有名詩人の作抔なり私も慰
半分に人の尻に付て真似をする事あり仲々面白し家内ハ女計り
にて而も孰も四十余の齡なれハ私共に力を置なるへし夫故当り
前の寓居人とハ思はず家内の人と見ると云て本に家内の通りに
暮し居から御祖母様決て案する事ハない内の御祖母様ハ七十四
才余なれ共至極達者なり

御尊父様

武夫拝

御座下

是ハ私の寓家の様なれ共其外の家とても大同小異なれハ右を一
体の様子と御承知有て間違なし

(長閑注記)

「明治十年一月二日達し日数五十九日

返事同月十九日第一号ヲ以出し」